

主論文要約

戦中との連続性における中間小説・風俗小説の再検討 ——南方徴用作家、林房雄・石坂洋次郎・丹羽文雄を中心に

須山 智裕

本論文は、アジア太平洋戦争期の南方徴用作家を取り上げ、戦後占領期の中間小説・風俗小説の興隆をもたらすまでの、彼らの文学上の動態および創意工夫を追いかけて考察するものである。南方徴用作家とは、一九四一年一月以降、国民徴用令に基づいて徴用され、南方で文化工作に従事した文学者たちのことで、その数は七〇名以上にも及ぶ。彼らは、現地住民に対する日本語の普及を中心とする「対占領地宣伝」、日本の軍人の戦意高揚と聖戦思想の普及を目的とする「対軍隊宣伝」、対敵放送の原稿作成といった「対敵宣伝」を担うとともに、南方滞在中、そして帰還後も、現地での体験に基づいた小説や随筆を執筆・発表し、講演や座談会も数多くこなした。

本論文の特色は、この南方徴用作家の活動を、任を解かれた後の占領期まで視野に入れて考察し、戦中・戦後の連続性を明らかにしていることである。社会システム論やメディア史研究では、この連続性に注目する視点がオーソドックスになっていると言えるが、文学研究にはあまり応用されず、戦時下の文学の研究と戦後（占領期）文学の研究が別々になされてきたというのが現状であろう。これに対し、筆者は一九四〇年代論という立場をとることで、戦時下の文学史と占領期のそれを架橋できると考えている。本論文では、文学者たちは外地で何を掴み取り、それを戦後の時空間においてどのように加工・転化することで、自らの創作（論）を成していったのか、ひいては中間小説・風俗小説の興隆をもたらしたのかを明らかにしていくということである。

そもそも中間小説とは、一九四七年の座談会のなかで久米正雄が使ったのが起源とされる用語であり、その際に久米が「代表的な中間小説」として挙げたのが、その時期の林房雄の小説であった。当時の林が多く書いていたのは、自らが戦中に訪れた外地を舞台にした読物小説で、それは戦後日本の「いま・ここ」から距離をとり、物語としての珍しさを打ち出すための戦略であった。だがその後数年のうちに、中間小説は、林の読物小説とは対照的に、「いま・ここ」にある闇市や復員兵などを題材とする風俗小説と同類視されるようになっていく。風俗小説とは何を写すのかを問題にする用語であり、純文学と大衆文学の間を意味する中間小説とは本来重なるものではない。だが、例えば丹羽文雄のような一定の権威のある文壇作家が戦後の世相という大衆的な題材を描いた小説は、パフォーマンスの意味も込めて過剰に通俗性を狙った林の読物小説よりも中間小説の中身として据わりが良く、中間小

説の議論と習合するのである。

つまり、中間小説・風俗小説とは、戦後の文学のあり方をめぐる重要な議論の一角である。ただし、従来の純文学への批判がなされたが、実現すべき内容は揺れていた。平野謙や荒正人、花田清輝ら、戦後に台頭した文芸評論家たちは、小説を現実に対して批評的であらしめるための虚構化や構造化を重視しており、私小説も風俗小説も現実を写しているに過ぎないとして双方を難じ、小説ジャンルとして純文学の筆頭の位置にあった私小説の文学性も認めなかった。一方、丹羽ら風俗小説作家たちも、志賀直哉に代表される文壇主流の私小説を批判した織田作之助「可能性の文学」(『改造』一九四六年一二月)以降、私小説への批判を強めて虚構化や構造化を主張し、平野らと文学観の奇妙な一致を見せるものの、丹羽らの小説が虚構化をなし得ているか、批評的であるかといった点で、両者は対立を深める。丹羽と風俗小説論争を繰り広げた中村光夫もまた、私小説の価値を引き下げて風俗小説と並べて批判し、代わりに西洋型の本格小説を上位に置いた。

これらは戦前から戦後を貫徹する文学の問題なのであり、それらの錯綜を解きほぐすことで、中村に代表される戦前／戦後を分ける見方を退け、文学の枠組の形成を明らかにすることができよう。

本論文の軸となるのは、林房雄(一九〇三～一九七五年)・丹羽文雄(一九〇四～二〇〇五年)・石坂洋次郎(一九〇〇～一九八六年)という三人の南方徴用作家である。もとより、これら三人の文学者を取り上げれば、南方徴用作家と中間小説・風俗小説の問題の総体が明らかになるというわけではない。しかし、中間小説の起点をなす林、常に風俗小説をめぐる議論の中心にあった丹羽、風俗小説と民主主義論・戦後日本論を接合して成功を収めた石坂は、研究が手薄なこの領域の把握の端緒として相応しい、つまりその骨格となる文学者たちであることは間違いない。

本論文では他に、海軍省外郭団体・くろがね会が発行していた雑誌である『海軍報道』と『くろがね叢書』も考察の対象としている。前者は、アジア太平洋戦争末期における海軍報道班員の稀少な執筆の場となっていたが、各文章の政治的目的があらかじめ指定される他律的な場でもあった。その結果、管見の限りいずれの小説も戦後に再録されなかったことが象徴するように、南方徴用作家としての活動の、その場限りで萎んでいく一面を示しており、『中央公論』掲載という条件も手伝って、文学者としての問題意識を持って書かれた丹羽の「海戦」との落差も浮き彫りとなる。

『くろがね叢書』は海軍兵向けに過去作を収録した慰問雑誌であり、掲載作の本文の改変や出版歴を、戦前、戦中から戦後にかけて辿ることができる点が特徴である。そうして見えてくるのは、大衆の思想や感性の枠組みが、敗戦を跨いでも継続していることであり、このことは文学を一九四〇年代論の立場から考えるうえで示唆を与えるだろう。

本論文は三部八章から構成される。以下に各部各章の梗概を示す。

第一部 陸軍報道班員の従軍体験

陸軍報道班員が戦中に何を、それをどのように転化して戦後の復活に至るかを明らかにする。

第一章 林房雄の南方体験と「失はれた都」——大東亜の「夢」を葬るまで

ここで取り上げる林房雄は、そもそも陸軍報道班員であったことが知られていなかった作家であるため、その南方視察の経緯や旅程を掘り起こすところから始めている。林は、二十年後の大東亜共栄圏を描く小説、つまり後の「剣と詩」(『毎日新聞』一九四四年八月一九日～一九四五年二月一五日)の執筆を陸軍から依頼され、その陸軍や毎日新聞社の多大な援助を受けて南方を巡行した。多くの一次資料から明らかにしたその旅程は以下の通りである——一九四三年一〇月一〇日前後に日本を発って、マニラで約二か月暮らし、ボルネオは短期間で後にして昭南に行き、約四〇日を過ごした。続いて一月中旬までにスマトラに到着し、約三週間の予定で視察して、最後にジャワに赴いた。そこから内地への空路の中継地である台湾に約二週間滞在し、一九四四年四月末に内地に帰還した。

こうした入念な準備を経て、「剣と詩」の「現代篇」が『毎日新聞』に連載されるが評判が悪く、結局、執筆の本来の目的である「未来篇」も書かれないまま敗戦を迎えた。このように「剣と詩」自体は失敗に終わったのだが、戦中の民族主義的な言動から戦犯作家と見なされ窮地に立たされた際、林はかえって戦中の従軍の経験を利用し、外地を舞台にした小説を立て続けに読物雑誌『小説と読物』に寄稿することで、復活を果たす。

こうした変転を跡付けたうえで、林の占領期の代表作である「失はれた都」(『小説と読物』一九四七年一月)を読解している。実在のフィリピン人作家をモデルにした作中人物や、イントラムロスの教会の描写など、「剣と詩」の多くを踏襲している同作だが、「憲兵政治」に携わっていない限り、大東亜共栄圏構想の理念を共有したことの責任を無化する機能を有するなど、敗戦後の状況に合わせて〈上手く〉加工されており、林の復活の一助となったと言える。敗戦後に日本の位置が激変する中で、戦中の体験が見取り図の改変によって、連続的に利用されたのだった。

第二章 石坂洋次郎の「人間的接触」という説得法——フィリピン従軍から『青い山脈』へ

「民主主義の教科書」として名高い石坂洋次郎の「青い山脈」(『朝日新聞』一九四七年六月九日～同年一〇月四日)に、フィリピンにおける宣撫の経験からの「学び」が活かされていることを明らかにしている。

陸軍報道班員としてフィリピンに派遣された石坂は、人見潤介が指揮する人見宣伝隊に

同行して宣撫を観察し、民衆に大東亜戦争聖戦論のようなイデオロギーを理解させようとする観念的な説法の無力さと、「相互の人的接触」が持ち得る説得力を目の当たりにした。この体験は、「湖水」（『三田文学』一九四四年六月）として小説化され、自らの気づきに昂揚するさまが描かれている。

敗戦直後の石坂はしばしば、封建的な現実の地盤を足場にして民主的な新しい生活を建設する困難さを打開できないでいることなどが原因で、小説が書けないということを書いているが、「ひもじい風景」（『改造』一九四六年二月）において、こうした沈滞期を乗り越える糸口を従軍体験に求めている。

そして生まれるのが「青い山脈」である。石坂は宣撫を観察した経験から、戦後において、左翼陣営が唱えるような生硬な理念の体系である「民主主義」ではなく、行動型の「民主化」を提示することにこだわっており、その観点から、「青い山脈」の山場をなす理事会における雪子陣営の逆転勝利について、新たな解釈を示している。すなわち、雪子らは理屈によって理事たちを説得することに成功したのではなく、芸者を職業とする浅利トラが男性の威容が上辺だけのものであることを暴露するなど、職業や性別等に囚われず「ザックバランに」話し合う状況を作り、その中で発生する「相互の人的接触」によって支持を集めたのだった。その説得法は、戦中には宣撫の一形式としてしか表現できなかったが、敗戦を跨ぎ、説得を受ける側の人々の主体性が重視され、「相互」という言葉が実質を伴うようになっていく。

第二部 くろがね会と海軍報道班員

海軍省外郭団体・くろがね会が発行していた二つの雑誌の分析と、海軍報道班員・丹羽文雄の従軍体験と戦後の復活までを辿る論考で構成している。

第三章 海軍報道班文学挺身隊と国民大衆雑誌『海軍報道』

『海軍報道』（一九四四年五月～一九四五年三月）は、海軍の募兵を目的とし、二十万部発行された号もある国民大衆雑誌である。本章では、『海軍報道』の概要や誌面構成に加え、同誌とも深く関わる海軍報道班文学挺身隊の結成の経緯や具体的な活動を、先行研究より詳細におさえている。

海軍挺身隊は、帰還した海軍報道班員の文学者たちが海軍報道部の指導を受けるまでもなく主体的に戦争に協力することを意図し、一九四三年末に結成されたが、雑誌等の出版点数や頁数が著しく減少するなか、生産の現場での講演が活動の中心となっていた。そうした状況下で、海軍挺身隊がペンによって〈活躍〉することのできた貴重な媒体が、月刊誌『海軍報道』である。

同誌には、日本海軍は大艦巨砲主義に固執し、航空機を軽視していたという旧来の歴史観

を覆す論説などが掲載されているが、本章では特に海軍挺身隊が寄稿した小説群を分析し、経験や評価等いずれの面においても戦後に引き継がれるものがない、アジア太平洋戦争末期における南方徴用作家の終局的な挺身のありさまを明らかにしている。文学者が、海軍報道部から編集部へ、編集部から文学者へという上意下達の構造の下請けとなり、海軍報道部が指定する政治的目的に適うように小説を供する時、その自律性は消失し、「戦後に開かれた「学び」」などは得られるべくもなくなる。例えば、井上康文の「旋盤は動く」（一九四四年一〇月号）が、工場の幹部によって少年工員の海軍志願が妨害される事例を減少させるという海軍の目的に極めて忠実であるように、文学者たちは、物語を十二分に海軍の宣伝内容に沿わせるという形で、政治への従属の極致を示した。

第四章 前線慰問雑誌『くろがね叢書』の探偵小説／歴史・時代小説

前線慰問雑誌である『くろがね叢書』（一九四二年一月～一九四五年二月（推定））の概要から書き起こし、同誌の探偵小説、そして戦争小説および歴史・時代小説に焦点を当て、慰問雑誌として興味深い点や、刊行を続ける中での内容の変化を論じている。『くろがね叢書』の最大の特徴は、既出の読物を集めたアンソロジーであるという点であり、それゆえに、掲載作の本文が、戦前ないし戦中の初出から同誌への再録、そして占領期の単行本への再録にかけて、いかに改稿され、流通していくかを追いかけて分析することができるのであり、一九四〇年代論の立場を取る本論文にとって魅力的な素材と言える。

まず探偵小説については、当初はアジア太平洋戦争期に適応したものを掲載していたが、選択の幅において、次第に制約が緩んでいったと推測される。例えば、大下宇陀児「巡業劇団」（第二輯）は、初出は『キング』（一九三六年一月）だが、『緑の奇蹟』（大都書房、一九四二年五月）に収録される際に、産業戦士の必要性が語られるなどの改稿がなされ、『くろがね叢書』には、この時局に合わせた本文が採用されている。だが、第二十輯の「探偵小説・特輯」になると、こうした戦中ならではの論理を取り入れた小説というわけではなく、エロティックな描写など問題視されそうな場面は見当たらないという消極的な指摘をすることしかできなくなる。

次に、戦争小説および歴史・時代小説について、まず、時局精神の提唱を露骨に行う戦争小説は、兵隊読者に敬遠されて不評だったからか、第五輯以降見られなくなる。その一方で、歴史・時代小説は、時代や立場、環境の懸隔が時局精神の提唱の露骨さを和らげる効果を発揮し得るため、初期から末期まで変わらず重宝される。

改稿に関しては、例えば角田喜久雄の「白銀秘帖」（『週刊朝日』一九二九年一月一日～二九日）が、性的な表現・描写を取り除くなどの改稿によって戦中の規範に適応し、そしてほぼそのままの本文で一九四九年に刊行された。このことは、戦前・戦後の思想や感性の枠

組みが断絶などしていないことを表すうえに、大衆文学を別席として置く文学観が、これらを検討せず、ある種の普遍であるかのように許容さえしてきたことを示している。

第五章 丹羽文雄における「デフォルマシオン」——私小説「海戦」から風俗小説への転回

「海戦」(『中央公論』一九四二年十一月)から「理想の良人」(『人間』一九四七年二月)へと至る、丹羽文雄の主要な小説および創作論を辿り、創作論の方は戦中から戦後へと引き継がれるものの、実作においては「私」が退いていき、風俗小説へと転じていくという転回を明らかにしている。

客観に徹する作家という像が強固な丹羽だが、海軍報道班員としてツラギ夜襲戦を目撃した経験に基づく私小説「海戦」において、「素人らしい感覚」を宿した「素人らしい目」で見つめる観察者として、海戦を主観的に領略することを試みた。それを文章化するうえで、丹羽はノートに記録を取る行為を打ち消すように、「実感」や「感覚」に即した情景の語りを展開することで、「活字の上に求めることの不可能」なはずの海戦の「実感」が、活字の上に表現されているように見せている。

敗戦を跨ぐと、丹羽は戦中の自我の問題化を避けるべく、「海戦」を「戦争の記録画」に切り下げ、敗戦間際の特攻基地に取材した一連の「海軍暴露物」(一九四六年)でも、主観による変形のない「現実そのまま」を描こうとした。だが、一九四七年に「虚構派」と「真実派」の対立図式ができあがると、「私」の内面を追及しないリアリズム作家・丹羽の立場は微妙なものとなった。それゆえ彼は「デツサン」に基づく「デフォルマシオン」を提唱し、現実を写す「目」への定評を引き継ぎつつ、他者のパーソナリティの追究における「感受性」の発揮をアピールすることで、「虚構派」として織田作之助や坂口安吾に比肩することを狙い、一時的に話題を呼ぶことに成功した。この創作論の原形は「海戦」に見出すことができ、それを風俗小説で理論化しようとしたと指摘することができる。

ただその結果、架空の人間を「デツサン」し「デフォルマシオン」を施すという曖昧さを抱え込んだからか、同時期に提唱した「非情の精神」が丹羽の作風のキーワードとして今日まで生き残る一方、それは忘却されていった。しかし、だからこそ、「デフォルマシオン」論には、戦争を通過した「私」の問題や「虚構派」と「真実派」の対立など、時代性が深く刻み込まれていると言える。

第三部 風俗小説の興隆前後

中間小説・風俗小説を文学史的な視座で捉えた上で、具体的に小説を読解し、その再評価へと展開していく。

第六章 林房雄の戯作者としてのカムバック——中間小説概念の黎明に触れて

林房雄は一九四七年に複数担当した文芸時評において、織田作之助「可能性の文学」(『改造』一九四六年一二月)以後の私小説批判の潮流に便乗するとともに、「新戯作派」の戯作精神を抽出してこれに同調し、文壇の寵児である彼らと束ねられることを目指した。その一方で、時と場を「いま・ここ」から離れた珍しい話という小説の原型に立ち返るという〈物語論〉を提唱し、戦中に訪れた外地を舞台にした小説を盛んに執筆したことで、闇市場等を題材とする「新戯作派」との差別化がなされた。「新戯作派」の代表格の作家たちは誰も従軍経験を持っておらず、さらに占領期には海外渡航が制限されたため、現代の「諸国物語」を書くことは林の特権だった。

やがて、大衆雑誌の編集者たちが〈物語論〉と同様の内容を説くようになるなど、林は彼らの支持を集めた。そして「妖魚」(『小説と読物』一九四六年八月)が、大衆雑誌の編集者を中心に選考・投票がおこなわれる第一回大衆雑誌懇話会賞の首席を獲得するなど、林は〈物語論〉とその実作により、大衆文学界では支配的な地位を得た。

それと同時期、彼は復刊された『文学界』に参加したが、いかにも通俗的なそれらは文芸誌という空間の中では悪目立ちし、かえって「新戯作派」との格差を広げることとなった。しかし、批判を浴びながら耳目を集めるのは林特有のスタイルでもあり、文壇へのカムバックを印象付けるという功も亦もたらした。

また、復刊後の『文学界』は、純文学と大衆文学という枠を取り払おうとする中間小説運動を推進し、非私小説派かつ非共産党系の四十代の作家という緩やかな括りで大同団結した同人たちが、中間小説作家という立場を分有した。このことが一因となって、当初は林の読物小説を代表とした中間小説という用語の指すところが、丹羽文雄や舟橋聖一に代表される風俗小説を含むまでに拡散していったと考えられる。なお、林は〈物語論〉と他作家の小説の批評を切り離しており、それと相容れない丹羽らの小説も好意的に受け止めることで、有力な作家グループとして露出することができた。

第七章 〈アルチザン〉の批評精神——『風俗小説論』を脱却するために

戦後占領期の文壇の状況として、戦後派と風俗派と民主主義派の三派鼎立であるという認識は、同時代において一般的なものであった。だが、この三派鼎立説は、風俗小説の地位が下降していったからか、昭和初年代における既成リアリズム文学・モダニズム文学・マルクス主義文学のそれと比べ、語られる機会は非常に少ない。本章では、批判を浴びつつも風俗小説が絶頂期を迎える一九四八年から、その地位が下がり切る一九七〇年頃までの道筋を考究している。

一九四八年に交わされたアルチスト・アルチザン論争は、その翌年に丹羽文雄と中村光夫を中心に交わされた風俗小説論争の前史とも言える論争である。花田清輝ら戦後派は、同派の牙城である『綜合文化』の座談会などで、丹羽ら風俗派をアルチザンと呼び表し、彼らの

小説は批評精神を欠いていると盛んに攻撃を加えた。これには、占領期の風俗小説の中心的な書き手が、復権を果たしたマルクス主義と距離を置く作家たちだったため、その批評精神が認められなかったという側面がある。実際、花田もマルクス主義者の立場からアルチストとアルチザンを切り分けていた。

その後、「芸術家」と「職人」の二項対立図式は、中村光夫が『風俗小説論』（河出書房、一九五〇年六月）で踏襲し、やはり丹羽らを「職人」の側に振り分け、それが参照され続けることによって、定説化が進んでいく。だが、同書で評価が高いのは第一章の私小説論であり、それ以前の風俗小説批判の集積に過ぎない第四章の風俗小説論がスタンダードとなっているのは、そのおこぼれにあずかっているだけである。したがって、良質な風俗小説に見られる批評の論述を積み重ねることで、その磁場を切り崩すことが可能となる。

例えば丹羽の「鬼子母神界限」（『新生』一九四六年一〇月臨時増刊）は、大量の人々が社会移動をしていった時代にもなお、人間をプロレタリアートやブルジョアに硬直的に分類しようとするマルクス主義者の人間理解を拒んだ先にある、他者との主体的な関わりの実践報告となっている。こうした風俗小説を、批評精神を備えていることと、娯楽性があって民衆に広く読まれるという元来の強みの両方が見えやすい、当時の用語の「社会風俗小説」と呼ぶことを提唱している。

第八章 石坂洋次郎「石中先生行状記 根ツ子町の巻」論——時代の「伝説」化を衝く風俗小説

前章で提唱した「社会風俗小説」のさらなる実例として、石坂洋次郎の連作「石中先生行状記」のうちの「根ツ子町の巻」（『小説新潮』一九四八年九・一〇月）を論じている。同作は、猥褻文書の頒布等を禁ずる刑法第一七五条を根拠とした摘発を受けたが、「好色文学」などではなく、「伝説時代」という表現を通じて、〈大日本帝国〉と〈戦後日本〉の、表面上の相違とは裏腹な構造的類似性を浮き彫りにするなど、現実に対して批評的な小説であることを明らかにしている。

小説家・石中先生は、現実の一面に「デフォルマシオン」を施して生まれる「フィクション」が「文学」であるという、当時広く共有されていた「文学」観を有している。そんな彼に対し、吉田青年は「伝説時代」という表現で、今日は、具現化されないまま言葉だけが氾濫・伝播し、架空の〈戦後日本〉が仮構される時代にあるという卓見を語る。すると、現実を喪失した「伝説時代」には「文学」の仮構性が埋没することになるため、石中先生は大いに動揺するのだ。石中先生自身が、こうした状況に解決を与えているわけではないが、本作品にはユーモアを交えながらも、文学がどのようなものであるべきかについての問いがあると言える。

石坂は作家としての出発期から、マルクス主義などのイデオロギーから距離を取る立場を貫いているが、本作に見られる「日本精神論」批判や「伝説時代」という批評は、第二章

で詳述したフィリピンにおける宣撫の経験に裏打ちされていると言える。ただ、戦後を「伝説時代」と見なすような、新日本の革命的建設に対して懐疑を示す姿勢は、左翼陣営から「保守反動」のレッテルを貼られ、痛烈な批判を浴びせられた。本論文では石坂に加え、林房雄と丹羽文雄を中心に論じているが、特にイデオロギーに対する懐疑の姿勢、そして戦中の活動やそうした姿勢ゆえに左翼陣営から執拗に攻撃された点は三者に共通する。

例えば、林房雄は随筆「自由人のノート」（『新生』一九四七年三月）においてトルストイを参照しつつ、「あり合せの規準や公式に頼り、他人の煽動に乗って行動する」者が「悪い意味の保守主義者であり、如何に生くべきかを自ら考え、自ら反省して新しい生活を創造するのが正しい意味の進歩主義者である」という見解を述べている。こうした保守主義と進歩主義の読み替えは、第七章で論じた丹羽文雄「鬼子母神界限」（『新生』一九四六年一〇月臨時増刊）の語り手が、人間をプロレタリアートやブルジョアに硬直的に分類して理解した気になることを拒み、実感に即した柔らかな言葉で理解しようとしていたこととも共鳴する。

このようにイデオロギーに懐疑を示す立場を取る時、必然的に作者自身の立場や主張は既存の体系的規範から切れて個別的となり、簡単に名づけたり分類したりすることのできる明瞭なものではなくなる。そのことが、彼らの中間小説・風俗小説が占領期に隆盛を極めながらも、特に文壇の主流派であった左翼陣営から批評性を認められなかった主因である一方、今日の研究者が個々の文学者やその小説の読解を積み上げていくべき大きな理由ともなる。

また、中間小説・風俗小説を、戦後の物珍しい風俗や世相への即応とのみ見るのではなく、その背景にある戦中の体験を踏まえることの重要性を繰り返し指摘している。石坂の「青山脈」（『朝日新聞』一九四七年六月九日～同年一〇月四日）には、「相互の人間接触」が持ち得る説得力への確信というフィリピンでの「学び」が活かされていたように、作者の戦中の体験を視野に入れることで、中間小説・風俗小説の真価を捉え得るのである。これは、インスタントな小説と解されやすい中間小説・風俗小説の見方に対して強く訴えるべき視点であり、本論文で一定の成果を挙げることができたが、他のジャンルの小説への敷衍は課題として残っている。一九四〇年代という区分を用い、戦時期と戦後占領期の連関が軽視されてきた作家史・文学史の記述を問い直すことが、改めて必要であると考ええる。

なお、本論文は、資料編①・②を巻末に付している。資料編①は、林房雄・石坂洋次郎・丹羽文雄それぞれの、アジア太平洋戦争期の初出目録である。林は初出目録が整備されておらず、今回挙げたものの中には、『マニラ新聞』掲載の随筆など、データベース類ではヒットしないものも含まれている。石坂には森英一の「石坂洋次郎著作年表稿」（『石坂洋次郎の文学』創林社、一九八一年一〇月）があるが、時代的な制約から漏れも多く、可能な限り補完を試みた。丹羽には充実した初出目録（岡本和宜『丹羽文雄書誌』和泉書院、二〇一三年

三月)があるため、全てを挙げることはせず、主に同書の誤りを正すにとどめた。

資料編②では、『くろがね叢書』に掲載された小説の初出と、同誌に掲載されるより前の再録を示している。この資料は、アンソロジーである『くろがね叢書』に、大正期から戦中にかけての膨大なアーカイブの中からどのような作品が選ばれているかを考察したり、掲載作の本文が、時代の流れの中でどのように改稿され、流通していくかを調査したりする際に有用であろう。